

## 「東海湖—研究の現状」シンポジウムの主旨

糸魚川淳二\*

### Introduction to the Symposium

Junji Itoigawa\*

伊勢湾周辺に丘陵をつくって発達する地層は古くから知られていて、地域ごとに、奄芸層群、瀬戸層群、常滑層群と呼ばれていた。しかし、濃尾平野の地下・伊勢湾底にも存在し、一連の地層であるので、最近では東海層群として、まとめて扱われている。時代はかつて鮮新世と考えられていたが、最近では中新世後期から更新世前期に及ぶとされている。

東海層群の研究は戦前のものは少なく、各地から産する化石の報告、地域の地質研究に含まれた形での地層の記載などであった。戦後になって、この地域の地質・化石についての研究が各地で行われるようになり、陶土・亜炭などの資源についての調査・研究も盛んになった。一方、地下水・地盤などの調査と関連して地下地質の研究も行われた。

その結果として、火山灰を使って層序を確立する試みがなされ、より新しい地層や海水がおおっていて、連続が確かめられなかった地層の対比が行われるようになった。「エレファントイデス象」・「アカシ象」などの旧象を含む哺乳類、メタセコイア・オオミツバマツなどの植物化石が発見され、精細な層序・堆積相の記載とあいまって、東海層群の実体が明らかにされ、隣接地域に分布する相当層である、古琵琶湖層群・大阪層群との対比も可能となってきた。

1980年代以後、地質調査所の5万分1の地質図幅調査が行われ、また、各種地質図の編纂があって、東海層群分布域の大部分において地質図が完成した。また、1970年代以後、各地で行われた団体研究・個人研究の成果が蓄積された。古地磁気層序を使い、フィッシュン・トラック年代が測定されて、地層の年代的位置付けが確立してきた。化石についても、これまであまりわかっていなかった貝類・昆虫・微化石などについて、

その実体が明らかにされてきた。

こうして、東海層群の第一次近似像を描く材料が揃ってきて、構造発達史が組み立てられ、古環境・古地理が復元されるようになった。さらに、これまで不明であった火山灰の起源が推定できるようになり、より広い、新潟・静岡などの日本各地を含めた地域との間で、火山灰による広域対比も可能となった。堆積相の解析も行われ、これまでと異なる東海湖のイメージが提案されるようになった。

たとえば、古地理図についてみると、最初は「東海湖」として、ひとまとめにした図がえがかれていたが、やがて、いくつかの時代に区切って図が描かれ、変遷の歴史が明瞭に見えるようになってきた。資料その他の関係から、描くことが困難であった地域、たとえば東濃地方についても、古地理の復元が試みられた。

こうした状況のなかで、第114回化石研究会2000年総会・学術大会—シンポジウム「東海湖—研究の現状」(2000年5月21日)が豊橋市自然史博物館において開催された。地層・化石について、そして、それにもとづく総合について、最新のデータを集め、「東海湖研究の現在」を知ろうというのが、このシンポジウムの目的である。

戦後を中心とした多くの研究によって、東海湖の実体はほぼ明らかにされたといえるが、細部にわたっては不明な点もある。また、完全に合意が得られていないことも多い。このシンポジウムをきっかけにして、更なる総合が行われ、研究が進展することが期待される。東海層群の分布と対比のあらましを第1図、第2図に示した。

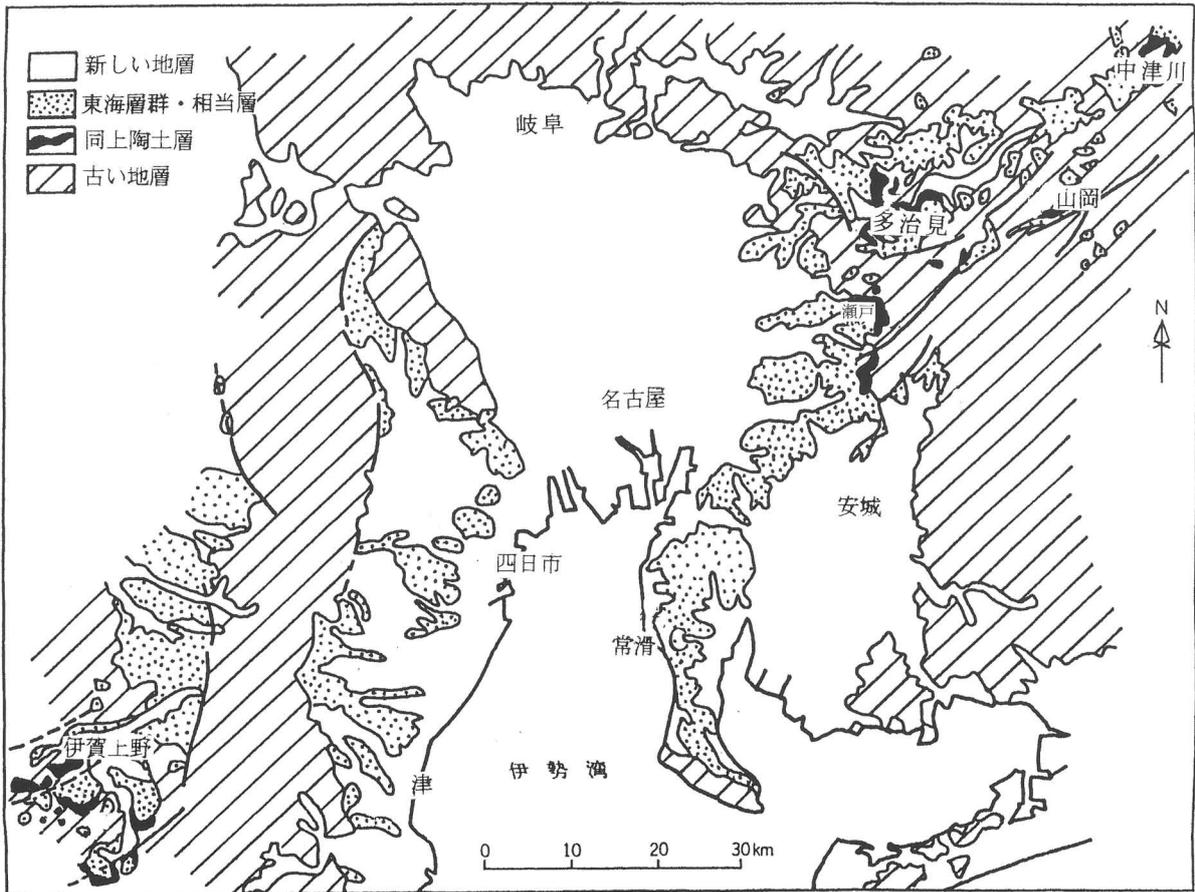
\* 豊橋市自然史博物館. Toyohashi Museum of Natural History. 1-238 Oana, Oiwa-cho, Toyohashi 441-3147, Japan.

原稿受付 2001年1月11日. Manuscript received Jan. 11, 2001.

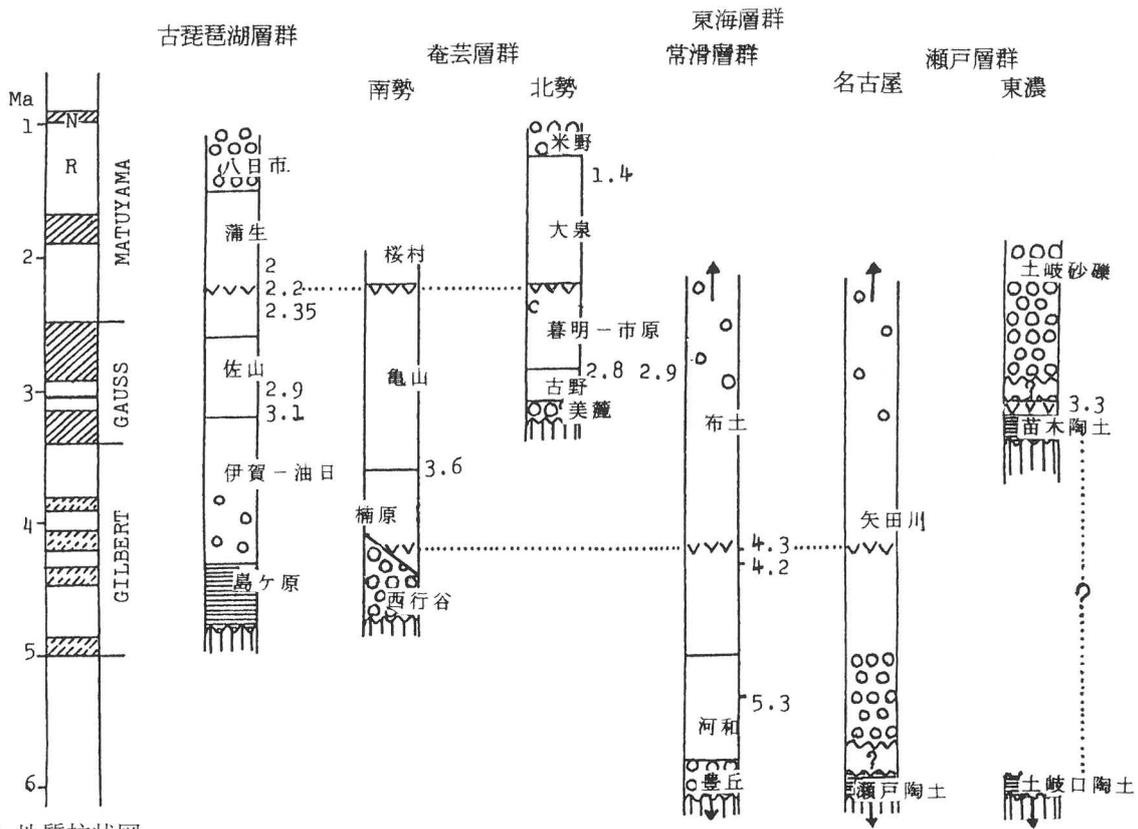
原稿受理 2001年1月26日. Manuscript accepted Jan. 26, 2001.

キーワード: 東海湖, 東海層群, シンポジウム, 中新世-更新世, 研究史.

Key words: Lake Tokai, Tokai Group, symposium, Miocene-Pleistocene, historical review.



第1図. 東海層群分布図.



第2図. 地質柱状図.